

しょう こん
『傷 魂』(宮澤縦一著)を読む

誰が私を殺したのだ

長友 くに

残されなければならない一冊

宮澤縦一。「1908年(明治41年)、東京浅草生まれ」。奥付はこう始められている。「京都帝国大学法学部卒。エマヌエル・メッテルに師事」。わざわざ書き込まれている「エマヌエル・メッテル」とは何者か。インターネットで調べると(本当に申し訳ないくらい簡単な検索。こういう時代なのだ!)ウクライナ生まれの指揮者でロシア革命直前にハルピンに亡命したらしい。来日して京都帝国大学のオーケストラを10年間指揮。教え子に朝比奈隆や服部良一がいる。宮澤縦一も法学部に入学しながら音楽の道に進んだらしい。戦後音楽関係で目覚ましい働きをし、昭和47年紫綬褒章と文化功労章を受けている。2000年(平成12年)に亡くなった。

その彼のところに赤紙が届いたのは昭和19年(1944年)5月のこと。36歳になっていた。中2日置いて入営。それからの1年半の軍隊生活は、一言一句この本を読んでもらいたい。抄録するのも気が重い現実がつづられている。この、重い現実を、何とか後世に伝えたい、という思いで、敗戦後1年の1946年(昭和21年)9月1日に『傷魂』を発行した。手記を書き終わってホッとしたところに「戦死公報」が届いた、という。すでに死んだものとして取り扱われていたのだ。本人が受け取ったからいいようなものの、「生きていた英霊」の悲劇を身をもって体験したのである。

ちょうど平成から令和に代わるころ、ヴァイオリニストの黒沼ユリ子さんが、書棚を整理中にこの本を見つけた。宮澤縦一が「過酷で悲惨な、そして馬鹿げた」戦争の真実を書き残して

くれたことに感謝し、「人類が創り出した戦争と呼ばれる蛮行と、そのために不可欠な軍隊という上下関係の絶対服従社会の存在という愚かな歴史を、二度と繰り返さないために、本書が持つ否定不可能な説得力は計り知れません。」と復刻を即座に決意したという。それが形になったのが令和2年(2020年)5月。その本が世田谷に住む知人から年末に送られてきた。

今、先の戦争を賛美する一群の人がおり、それは政権内部にはびこっている。人のいのちも人権も目に入らず、福島第一原発事故で出た汚染水を海洋放出する、という、現在にも未来にも責任を取らない、まさに戦前の軍隊と同じ体質ではないか。命がけでこの政権を倒そうという人も見当たらず、多くの国民は「成りゆき任せ」の態度をとっている。この後に来る、地球規模とっていい「大崩壊(カタストロフィ)」には目をつぶって!

輸送船のなかで

宮澤縦一の、現実裏付けされた文章は、重く深い。それを拙い筆でたどったとしても、読む人に戦争の現実を伝えることができるのかどうか。でも、戦後75年以上を経て、すでに「従軍」の悲惨さを語りうる人が少なくなった今、何が起こったのかをその片鱗なりとも伝えることが現代に生きる者の務めではないかと思う。

昭和19年の5月8日に目黒の部隊に入隊。来る日も来る日も外征の準備に追われた。持ち物すべてに名前を縫い付ける。対空射撃と縄梯子の昇降訓練。空からの攻撃に対処するものと艦船の沈没時に速やかに退避する訓練だったが、町内会のバケツリレーと同じく、実戦では何の

意味もなかった。5月末、門司から乗船。しかし「暁に祈る」の歌詞とは全く違う奴隷船・地獄船とも言うべきひどいものだった。坪当たり13～15人が詰め込まれ、その上に何十キロにも及ぶ装具・雑嚢・水筒・帯剣・鉄帽・小銃を各自が持っている。さらに南に進むにつれて高まる暑さ。息苦しさ。船底の丸窓から深呼吸するのも列をなすありさま。便所も1時間、昼間は2時間待ちも。寝る場所を探すのも一苦勞で、通路に横になっていると便所通いの兵に踏みつけられる。しかも便所は汚物で汚れ放題だから、糞だらけの靴底で踏まれるのだ。

そして「水」。ちょこ一杯の水が手に入らない。鉄管から滴り落ちる水を飯盒で根気よく集めて飲んだ兵隊が、顔が変形するほど殴られた。

生死を彷徨った戦場

やれやれ生き延びた、と思った6月2日。寝入って間もなく魚雷の攻撃。潜水艦にやられたのだ。場所は台湾の南、バシー海峡。(そこはすでに日本の制空権・制海権はなかったはず) 通路に寝ていた宮澤は、救命胴衣を首からかけて上へ上へと階段を上があったが、それを後ろから引っ張って奪おうとする兵がいる。大混乱の中、甲板に出てみれば船尾が爆発。たくさん積まれていた自動車も跡形もない。後続の船も火だるま。「阿鼻叫喚」そのままの光景が目の前にあった。



南方戦線を行く皇軍兵士たち

「軍人は信義を重んずべし」という軍隊では、「員数をつける」といって官品の盗みあい公然と行われ、盗られた兵は「とられたやつが間抜けなのだ」とビンタを食らう。清潔をモットーとする軍隊で、シラミや南京虫がはびこり、「適材適所」どころかいい年配の通信技師や教授らが応召されて馬糞掃除をやらされ、前科者ややくざ上がりに事務を執らせるという愚行が繰り返された。「軍人勅諭」を丸暗記し、「戦陣訓」を唱えられるようになって、実際は正反対のことをしていたのだ。「形式的な愚劣な精神教育が国を禍(わざわい)し、ついには今日、敗戦の憂目まで見るような破目に陥(おとし)れたのだ」。兵隊自身の口から「將軍商売、下士官道楽、兵隊ばかりがご奉公」といわれるような状態。

バシー海峡で遭難し、基隆(キイルン、台湾の町)に運ばれ、驟雨でずぶ濡れになりながら乗船を待たされたあげく、マニラに向けて出発。

途中爆撃を受け、非常警戒の混乱の中、所持品の盗難があった(軍紀が緩んでいた証拠か)。マニラ滞在中サイパン玉砕や東条首相の辞職、そして輸送船の多くが海の藻屑と消えたことを知る。たどり着いた兵も靴を失ってはだして歩くものもあり、日本の敗戦は比島の人に予想されるものとなった。

マラリア・デング熱・熱帯性潰瘍などの重病者をマニラに残し、ミンダナオ島に向かう。その船は一度沈んだものを引き上げた、というぼろ船。またすし詰めで便所通いも一苦勞、おまけに兵隊の食事は一日2食になり、3食で副食付きの将校との差がひどくなる。

ミンダナオ島カガヤンでの数日のあと、中隊はデルモンテ飛行場の建設に出発したが、熱帯性潰瘍を患っていた宮澤は病兵30人ほどと残された。飛行場の建設を終えた中隊は、ダバオまで400kmの行軍をした。フィリピンの暑熱の中、何日も何日も重装備を持って歩く。行軍中何人もの兵隊が倒

れた。気が狂ったり、首を吊ったりする兵も出た。そして病兵はカガヤンに連れてこられ、日ならずして死んでいった。

9月9日、初めて米軍の空襲があった。対空射撃の猛特訓の効果もなく、かえって米機の急降下と機銃掃射を招く。これっきり米軍に発砲する機会を失ってしまう。

物価は高騰し、ヤシの実・バナナの茎の芯・カンコン(野菜)・芋の葉などを食べて暮らす。

10月20日、レイテに米軍上陸、そこに近いカガヤンも徹底的に破壊された。山奥に逃げ込み、蛇やカエルを食料にする。カガヤン残留組にも南端のダバオ州の原隊に復帰するよう命令が下された。400kmの行程。どこまで行っても麻畑の中、中隊についてみれば人数は驚くほど減り、動けるものも体重が半分になるくらい痩せていた。理不尽な軍の命令に振り回され、重装備でミンタルにたどり着いたが、それから空襲から逃げ回る日々。兵隊としての統率が失われ、自分勝手に、三々五々逃亡する兵たち。着るものも履くものも種々雑多になり、上等兵が手榴弾で自決した時など血まみれの靴・時計・万年筆などがはぎとられ、兵隊の身につけられた。遺体はそのまま放置、埋葬されることもなかった。

生き残ったのが幸せだったのか

衰弱と飢餓と睡眠不足で倒れこむように休んでいたとき、爆撃があった。そのときは無事だったが、3日後に左足に砲弾を受けた。同行していた兵や在留邦人は逃げ、マラリアにかかった兵と2人取り残された。繰り返す激痛とわく蛆、吸い付くヤマビル。食べるものはもちろんない。通りかかった軍人2人が飯盒に雨水をためて飲むようにといい、そして自決用の手榴弾を置いて行ってくれた。どうせ助からないのち、と、自決を覚悟したが、決断がつかない。思い切って手榴弾を投げてみると、不発だった。一気に力が抜けた。衰弱が加速度的に加わり、ハエが顔にとまったり、アリの口の周りを這っても追い払う気力もない。

密林に置き去りにされてから12日目の朝、

人声が聞こえた。気がつくと、米兵に囲まれていた。殺されると思ったが、案に相違して担架に乗せられ、病院に運ばれ、手術を受けた。

「動物的生活から、人間的生活へ！

奴隷から、自由人に！

こうして私はまた再び還元したのであった。」

最後に北條さなえ(「原爆許すまじ」の作者)の「戦いに敗れた兵士の歌」が引用されている。

戦友の声を聴くように…………

誰が私を殺したのだ
夜な夜な悲しい亡霊たちが
街から街をさすらっていく
血みどろの口 さけた胸
折れたつるぎを振りながら
敗れた軍服をひきずって
廃墟の街をさすらっていく

誰が私を殺したのだ
平和な家から呼びたてて
あわれな物いえぬけだもののように
戦いの野にかりたてた
むじひな苦しい戦いの野へ
何の故とはつゆしらず

あわれな物いえぬけだもののように
誰が私を殺したのだ
胸にひらく傷を見よ
血潮にけがれた此の手を見よ
きけ天をおおう嘆きの声を
かばねの山にうずもれて
兵士はむなしく死んでゆく
お> 血潮にけがれたこの手を見よ

誰が私を殺したのだ
ふるさとの恥と嘆きの中に横たわる
もはや私は問わずにはいられない
私の妻はうえになき
私の子供らは死んでゆく
胸をおおう一枚の布もなく
お> もはや問わずにはいられない